

機関番号：37404

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：平成 20 年度～平成 22 年度

課題番号：20520452

研究課題名(和文) 統語論と語用論のインターフェイスにおけるムード

研究課題名(英文) Mood at Syntax—Pragmatics Interface

研究代表者 廣江 顕 (HIROE AKIRA)

尚綱大学・文化言語学部・文化言語学科・教授

尚綱学園図書館長

研究者番号：20369119

研究成果の概要(和文):主節と従属節で観察される非対称性のち、とりわけ本研究では法(mood)に関する統語的非対称性を扱い、その特性を発話の力(illocutionary force)という観点から捉える「発話行為の合成(speech act compounding:SAC)」という仮説を提案し、SACが命令文のみならず根文一般に適用されることを予測し、その予測が正しいことを検証した。また、その操作を可能とする統語的環境が「描出話法(Represented Speech)」に制限されるという事実を発見した。

研究成果の概要(英文): This research project explores an aspect of syntax—pragmatics interface, focusing in particular on a grammatical category *mood*. We have argued that modal asymmetry, where it is observed that embedded imperatives cannot be allowed, can be syntactically captured in terms of illocutionary force. More specifically, we have presented a restrictive mechanism “speech act compounding, thereby making it possible for two distinct illocutionary forces to be integrated into one single speech act under so-called Represented Speech environments. It is, then, predicted that root sentences as well as an imperative sentence can occur in embedded clauses under the same environment. The prediction was, in fact, borne out.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20 年度	500,000	150,000	650,000
21 年度	500,000	150,000	650,000
22 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：基盤研究(C)

キーワード：mood, illocutionary force, complementizer, represented speech, speech act compounding

1. 研究開始当初の背景

補文化辞及び補文化辞句構造を中心とした機能範疇の研究は、90年代前半から現在に至る迄、ヨーロッパの言語における副詞節(adverbial clause)を主な研究対象とした研究が飛躍的に進展したことにより、80年代を中心とした「原理と変数によるアプ

ローチ(principles-and-parameters approach)」期に得た知見と比較しても、より豊かな構造層を形成していることが明らかになった。さらに、Chomsky(1999)で提唱されて以来、理論的な精緻化が進んでいる「フェーズ(phase)理論」と相俟って、補文化辞層は理論的にますます重要な位置を占めるに至っ

た。

ところが一方、機能範疇一般の研究の進展に伴い、個別言語で観察される主要部(とその投射)に関し、意味解釈を基にした個別言語に固有な機能範疇が、記述的妥当性を満たすために提案されるといった方向にも研究が拡大してきた(e.g., Rizzi et al.(2004))。この問題意識は、ミニマリズムの精神、とりわけ「経済性(economy)」の原理とも相容れないものである。経済性の原理が如何なる形式で適用されるかといった問題意識は、基本的に補文化辞層の研究についても共有されなければいけないが、ヨーロッパ言語(とりわけ、イタリア語等(Manzini (2011))では、いまだ記述的レベルの研究段階に留まっていると言わなければいけない。

以上のような状況において、補文化辞及び補文化辞句構造は「語用論との架け橋」(Haegeman(1994))であるとの認識が生成文法理論研究のコンテキストでは持たれてきた(e.g., Riddle(1978))。しかし、理論内の理由により、インターフェイス研究、とりわけ(意味表示とのインターフェイスを介した)語用論とのインターフェイスが十全な形で行える研究環境が整えられていなかったため、90年代後半から今日に見られる程には関心の高まりを示さなかった。にもかかわらず、生成文法理論の研究者の間では萌芽的な形ながら問題意識は持たれていた。散見される研究からいくつか代表的な知見を挙げれば、時制(tense)とのインターフェイスは Enç(1987)、話題化(topic)と焦点(focus)を含む情報構造とのインターフェイスは Rizzi(1997)や Erteschik-Shir(2007)、pragmatic prominenceあるいはpoint of viewといった概念とのインターフェイスは Sells(1987)、Zribi-Hertz(1989)、Tenny(1998)、

Speas(2000)、またさらに、節構造の階層性を基盤にした「発話行為法(speech act mood)」とのインターフェイスは Cinque(1999)や Speas and Tenny(to appear)、それに法(仮定法現在)とのインターフェイスは千葉(1987)といったものがあつた。

2. 研究の目的

本研究以前は、英語の補文化辞消去(complementizer deletion:CD)という事実に関心を持ち、そのメカニズムの解明を試みる研究を主に行ってきた。具体的には、CDが可能かどうかを決定する要因として「法(mood)」が関与しており、法は顕在的な文法形式でマークされるだけでなく(例えば、英語では補文化辞、助動詞、それに屈折接辞)、隠在的な文法形式でもマークされているという仮説を立て、統語論の領域のみならず語用論の領域、つまり文脈や状況といったものにも法の概念を拡大しなければならないとする主張を行った(Hiroe(1999))。その後、通言語的には、法は補文化辞の形態(Modern Greek)、補文化辞に編入される接辞(Polish)、法動詞(French)、法副詞(English)、法不変化詞(Modern Greek)といった文法形式でもマークされることが調査の結果明らかになってきた(Hiroe(2006a))。いずれの形式でマークされようとも、法が意味解釈される場合の作用域はその文より広いものになるため、統語形式と意味解釈の平行性を仮定すれば、文(あるいは節)の構造上最も高い位置にLFインターフェイスではなければいけない。まさに、その意味で補文化辞(及び補文化辞句)は適切な位置にあり、かつ語用論への架け橋としても機能しているため、理論的にも補文化辞句を利用し統一的に扱い分析するほうが望ましいとの主張も行った(廣江(2006b), Hiroe(2007), and Hiroe(to appear))。

そうした研究過程で、選択される従属節の法のみならず主節の法と如何に関わっているかという疑問が生じた。つまり、主節が直説法ではあるものの、疑問文・否定文あるいは述部を合成した環境になれば、補文の法が異なる様相を帯びる例が（特にロマンス語において）少なからず存在する事例に関心を持つに至り、補文選択 (complement selection) 上の問題として解明を試みたい。

また一方で、補文化辞を介した語用論的領域との法に関するインターフェイスを解明する統語理論構築の一端を担うべく、単文、文と文との接続関係、節と節、とりわけ主節と従属節との選択（併合）関係に法がどのように関与しているか研究を行う計画である。例えば、命令文が主節では許される一方で、従属節では許されない、という対照的な事実については、私が知る限り、意味論的な普遍的制約としてアプリアリに位置付けられている解決法があるのみであった (Portner(2003))。本研究計画では、補文化辞句層 (CP-layer) と語用論とのインターフェイス特性から法の埋め込みに関する一般的条件を導く試みを行う予定であった。従属節として一般に分類されている関係節（生成文法理論では、「付加詞節」）にも法認可に関する制限があることが知られており (千葉(2003))、この制限もまた同様の条件として定式化することも研究目的のひとつであった。

3. 研究の方法

研究方法として、研究テーマを扱った過去の文献にあたり、先行研究で提示されたデータ（の観察）に基づいて構築された仮説を整理し、詳細に検証を行い、問題点を浮き彫りにし整理してきた。

その後、すでに協力を依頼し許諾して頂

いた、インフォーマント経験が豊富なネイティブ・スピーカー (Tracy Franz, Josh Norman, Judith Rabinovitch, Tim Rabinovitch) にインフォーマント調査を行い、先行研究で提示されたデータを再検証した。一定程度の知見及び事実が蓄えられた段階ごとに、仮説を立て、比較的小規模な研究会または学会 (Kumamoto Linguistic Circle, Fukuoka Syntactic Circle, Fukuoka Linguistic Circle) で、生成文法の研究者のみならず、広く意味論、語用論、コミュニケーション論、認知言語学、第一 (二) 言語習得、心理言語学といった分野の研究者に成果を公開し、コメントや反論を広く求めていきながら、本研究で提示したデータ、仮説、論証の手順といったものを修正、拡張、発展させ、全国学会 (英文学会(2010)) 等で発表を行った。

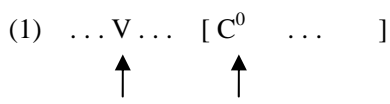
4. 研究成果

授業教材として採用していたテキスト (*Serendipity: Accidental Discoveries in Science*) で発見したデータにおいて、英語の埋め込み形式としては、本来不可能な、名詞を限定的に修飾する複合形容詞句の補文が修飾される名詞と形容詞の間に埋め込まれている例を発見した。生成文法の理論的研究のコンテキストでは、「主要部終端フィルター (Head-final filter)」に違反する例として重要なものだが、一般に英語の構造にどのような埋め込み構造が許容されるかという、より大きな問題に発展していく糸口となった。

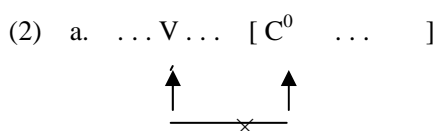
まず、本研究で計画していた、最も典型的な埋め込み構造である動詞（句）補文から研究を開始した。これまでの研究では、主に補文にマークされる文法範疇であるムード (mood) に注目し、補文化辞消去の問題を主に扱い、補文化辞消去のメカニズムは、

主節動詞（あるいは主節動詞を含む述部）と選択される補文の形式を、ムードを介する併合形式の一端として捉える試みに成功した。同時にまた、ムードという文法範疇は時制(tense)と同じく、統語論固有の領域だけでなく言語機能の外側、つまり意味表示というインターフェイスを介した語用論の領域の問題として捉える必要があることを主張してきた。

以上の研究成果は、下記(1)に例示されるように、通常を選択関係(selectional relation)における併合形式の一翼を解明するものであった。



(1)に例示される形式のみならず、統語論の領域の問題か否か、依然として議論のある発話行為(speech act)のレベルを統語論の問題として解決した。この問題では、意味論の領域では「普遍的な制約」とさえ位置付けられている、埋め込み節に主節とは異なる「発話の力(illocutionary force)」を埋め込めないとする定説に反例を示しそのメカニズムを解明した(F; illocutionary force)。



b. ... V (F¹) ... C⁰(∅)(F²) ...

その反例では、(1)に例示されている構造とは異なり、主節動詞と埋め込み節には選択関係はなく、言わば付加節(adjunct)として併合されていると主張し、異なる発話行為は「発話行為の合成(speech act compounding)」という統語的なメカニズムにより、全体として一つの発話の力に合成されているとの提案を行った。また、(2)の構造が許容されるのは、伝統的に「描出話

法 (Represented Speech or free indirect speech)」と呼ばれる環境であることも示した。

ただし、これからの課題として、英語の場合、如何なる埋め込み構造の形式が許されるのか、また通言語的にどの程度類似した形式が見られるのか（見られないのか）を調査し、その差異をパラメタに還元できるのか否かといったことが残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

①廣江 顕、「Marry/Get Married Withの容認可能性について」、第 16 回英語語法文法学会予稿集、2008、pp. 30-36.

②廣江 顕、「Stronger than usual acidは可能か」、第 17 回英語語法文法学会予稿集、2009、pp. 16-19.

③廣江 顕、「Marry/Get Married Withの容認性」、英語語法文法研究、第 16 号、2009、pp. 175-179.

④廣江 顕、「法の非対称性」、尚絅学園研究紀要、A. 人文・社会科学編、第 4 号、2010、pp. 65-78.

⑤廣江 顕、「命令文の埋め込み制限」、*Proceedings of the 82nd General Meeting of the English Literary Society of Japan*、2010、pp. 107-109.

⑥廣江 顕、「HFF違反の構造的特性」、尚絅学園研究紀要、A. 人文・社会科学編、第 5 号、pp.89-97.

[学会発表] (計 4 件)

①廣江 顕、「Marry/Get Married Withの容認可能性について」、第 16 回英語語法文法学会、静岡県立大学、2008 年 10 月 18 日.

②廣江 顕、「Stronger than usual acidは可能か」、熊本言語学会、2009 年 9 月 4 日.

③廣江 顕、「A Typological Approach to Complementizer Deletion」、福岡言語学会、2009 年 12 月 18 日.

④廣江 顕、「命令文の埋め込み制限」、日本英文学会第 82 回大会、神戸大学、2010 年 5 月 30 日.

[図書] (計 1 件)

①Hiroe, Akira (in print) “Modal Asymmetry”、『稲田先生ご退官記念論集』、2012 年 3 月出版予定.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
○取得状況（計0件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等
該当無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣江 颯 (HIROE AKIRA)

尚綱大学・文化言語学部・文化言語学科

尚綱学園図書館長

研究者番号：20369119

(2) 研究分担者

該当者無し ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

該当者無し ()

研究者番号：

